後藤先生との出会い

松村一男

これといった目的意識もなく大学に入った私であったが、四年生になる頃には企業に勤めるよりは、西洋文化のルーツとしてのギリシア・ローマ文化わけても宗教の研究をしたいと願うようになっていた。そんな時、偶然にも八王子の大学セミナーハウスで西洋史の秀村欣二氏を中心として古典古代の文化についての講座が催されることを知った。私のいた一橋大学は社会で役立つ実学の講義が中心だったから、自分の関心に近いセミナーハウスでの講義に参加することは、どのようにしたら将来も古典古代への関心をもって生活していけるか分からずに不安を持っていた私にとって、一筋の光明にも似た希望を与えくてれた。

参加された経験のある方は御存知のように、一泊二日のこのセミナーは全員に対する講師の先生方の講義のほかに、グループに別れて一人の先生と特定の主題についてのディスカッションを行なう。私はこの個別ディスカッションに、後藤先生によるギルガメシュ叙事詩を考えるグループを選んだ。ギリシア文学、ローマ文学、キリスト教などではなく、オリエント宗教のグループを選んだのは、私にとってまったく未知の分野であったため漠然とした魅力があっただけに過ぎない。この時の私は後藤先生についても、宗教学の広がりの奥深さについても何等知ってはいなかった。

はじめてお会いした先生の印象は穏やかでもの静かな紳士というところで、ギルガメシュ叙事詩の持つ魅力や問題点を自分から指摘して教えるよりは、我々学生が自由に討論してその中から自発的に理解してくれるのを持つといった態度でディスカッション・グループは進められた。こうした先生の指導態度が我々参加学生にとって良かったか悪かったかは、一概には決められない。なにしろ学年も専攻もバラバラで、ほとんどがギルガメシュ叙事詩を読むのもはじめてという集団である。この時は、ギルガメシュ叙事詩についてその不可思議さのみを記憶して、ある意味で不満を持ちつつセミナーを終えた学生も私を含めて少なくなかった。

しかし、後藤先生の人柄がよく表われていると感じたのは、その後に先生の取られた態度であった。セミナー終了後しばらくして、先生が我々のうちもっと詳しく知りたいという希望者を研究室（元サルの部屋）に集めて一日勉強会を開いてくれたのである。こうした先生の学生に対する暖かな心遣いが私や小山田（現、東）さんをして後に大学院への進学を決意させた一つの要因であったのだろう。

大学院で宗教学を研究したいと相談したおりの先生の態度は賛成とも反対ともつかぬものであった。研究職を目指したいという希望を述べた時にもやはり同様だった。もちろん、私の関心が先生の専門とは直接つながらず、アドヴァイスが難しいということもあったに違いない。しかし、先生

の考え方は、推測するに自由放任、あるいは実力は自分で鍛えねばならない、というものであったらしい。具体的、直接的な研究へのアドヴァイスはほとんど記憶にない。しかし少なくとも私の場合にはそれが良かったのではないかと今は思っている。特定の対象と研究方法を指示されていたなら、関心が拡散して容易に収束しない私などはきっと反発してしまったであろうからである。

先生の論文のうち、専門の旧約聖書やアッカドの宗教やパレスチナ考古学に関するものは私には猫に小判だから（もっとも「エヌマ・エリシュ」の翻訳にはたいへんお世話になっている）、個人的に大いに教えられ、記憶に残っているのは、大学セミナーハウスでの全体講義に基づく「生と死のバランス――古代オリエント宗教史の場合」（秀村欣二編『神話・文学・聖書』教文館）と『講座宗教学』第一巻の「宗教史学の理論と方法――エコロジーの観点から――」ということになる。考古学から説き起こし、長期にわたって不変のまま存在し続ける宗教の基本形態の重要性を指摘するこれらの論文は、対象こそ違うが私の研究にもつねに一つの指標・目標となっている。